

日本列島出土磨製石剣再考
—— 縄文時代晩期～弥生時代前期の資料を中心に ——

平郡 達哉

2017年3月
島根考古学会

日本列島出土磨製石剣再考

—縄文時代晩期～弥生時代前期の資料を中心に—

平郡 達哉

1. はじめに

磨製石剣は東北アジア青銅器時代文化を構成する一要素をなす物質資料である。中国東北地域、沿海州、朝鮮半島、日本列島に分布するが、出土点数や形態の多様性からみて、その中心は朝鮮半島にある。朝鮮半島青銅器時代の磨製石剣は1300点を超えるものと考えられる。この数は韓国における持続的な発掘調査の進行によって今度も増加していくだろう。

このような磨製石剣は朝鮮半島では青銅器時代になると墳墓の副葬品として登場し、次の初期鉄器時代になると突如としてその姿を消す。青銅器時代は農耕社会が成立し展開していく段階にあり（安1996）、磨製石剣はそのような時代に出現した支石墓や石棺墓の副葬品として納められた。朝鮮半島出土磨製石剣の性格についてはいくつかの論考で言及されており（後藤2000、朴2004、裴2006、平郡2012）、農耕社会の成立・展開と関係を有すると考えられている。

朝鮮半島と海を隔てて位置する日本列島にも磨製石剣が見られ、弥生時代の開始期に朝鮮半島南部から対馬を経て九州北部に流入したと考えられる。日本列島出土の磨製石剣については古くから関心が持たれ研究が行われてきたが、その起源地である朝鮮半島における磨製石剣研究の成果との比較を通して再検討することも意義を持つと考える。

本稿では90年代以降、朝鮮半島での磨製石剣研究が進展した状況を受けて、縄文晩期から弥生前期の資料を中心に集成作業を基にした基礎的考察を行い、日本列島出土磨製石剣を再検討することが目的である。

2. 日本列島出土磨製石剣をめぐる研究史

日本列島出土の磨製石剣に対する研究の流れについては、長沼孝と種定淳介によって1980年代までの研究史がまとめられており参考となる（長沼1986、種定1990）。ここではそれを踏まえて、その後の調査・研究動向も含めて述べることにする。なかでも、縄文晩期から弥生前期にかけて出土する磨製石剣に重点を置いて調べてみよう。

日本列島出土磨製石剣の研究史は研究の方向性を勘案すると、大きく4つの段階に分けることができよう。

第1期：青銅器研究の進展に伴う金属器模倣品としての石剣に対する関心の高まりと基礎的研究の開始（～1945年）

日本列島出土磨製石剣に関する言及は、嘉永7（1854）年に刊行された『讃岐国名勝図会』第一巻に記されている、享保20（1735）年に香川県旧庵治町沖にて海中から引き上げられた磨製石剣に関する記述が最も古いものと考えられる。

その後、磨製石剣に関する関心が高まっていったのは19世紀後葉のことで、そのきっかけとなったのは東京人類学会の設立であり、東京人類学会雑誌に磨製石剣関連の文章が掲載されていった（種定1990）。まず、朝鮮半島出土の磨製石剣について、明治19（1886）年に神田孝平が開城から出土したと伝わる磨製石剣を『東京人類学会報告』の「雑記」にスケッチと共に掲載しており（神田1886）、これは朝鮮半島出土磨製石剣に関する最初の記述となる。

1894年には小川敬養によって、福岡県東部から出土したとされる石戈とともに現在の中間市から出土した1本の有柄無段式石剣が紹介されている（小川1894）。

1920年代初めを前後した時期にかけての一連の論考で、中山平次郎は福岡県出土の磨製石剣に対する詳

細な報告とその性格づけについても言及している（中山1918；1921a・b）。弥生時代中期以降に見られる剣身の厚さが1センチを越え、その断面が明瞭な菱形を呈するような有茎式・無茎式石剣について、硬質の岩石を用いている点、刃部が非常に鋭利である点などから、副葬用に製作されたのではなく、「金石併用時代に於ける実用的兵器」であろうとしている（中山1921）。

1920年代には、後藤守一による愛媛県宝剣田や対馬出土の磨製石剣（後藤1921；1922；1923）、西園寺富水による愛媛県忽那島出土磨製石剣（西園寺1923）など西日本を中心とした地域別の資料紹介が行われていった。なかでも、後藤守一は1922年の論考において対馬各所で出土した磨製石剣を紹介しつつ、その祖型として中国の銅剣との関わりについても言及している（後藤1922）。

そして、日本列島における青銅器特に銅剣、銅矛、銅戈といった武器形青銅器の基礎的研究が進んでいくなかで、それら青銅器を石で模倣した器物のひとつと考えられ、銅剣・銅矛の分布と重なるように発見される磨製石剣に対する研究も始まった。

1922年、梅原末治は磨製石剣について銅剣を模倣したもの（Ⅱ～Ⅳ）とそうでない石槍形（Ⅰ）とに大別し、Ⅱ：支那式銅剣、Ⅲ：クリス形銅剣、Ⅳ：細形銅剣とした。石槍形は無茎のものから有茎のものへと複雑化するとした。そして、「此の種石器（筆者注：磨製石剣）は一種の金石併用時代の所産」と見た（梅原1922）。

1925年、高橋健自は『銅銚銅剣の研究』の中で「第十一章 石剣との関係」という章を立てて、石剣の種類、分布（中国東北地域、朝鮮半島出土品を含めた94点を一覧表で提示）、出土状況について整理し、銅矛銅剣との関係について論じた（高橋1925）。

石剣の分類については梅原末治が提示した4つに分ける案を受容し、次のとおり第1類から第4類に分けた。

第一類＝「鉄剣形」：断面が菱形を呈し、鎬と茎を有するものであり、鉄剣と形態が似ていることからこの名称を付けた。その分布は中国東北地域から近畿地方にいたるまで最も広く見られる。

第二類＝「有柄式」：明確な関があり、木質等の柄を別途装着する必要がなく、把握に適した柄があるもの。その分布は朝鮮半島から九州北部を経て四国にある。

第三類＝「有樋式」：細形銅剣に類似し、脊を挟んで相対する二条の樋があるもの。その分布は最も少なく、朝鮮半島西北部および南部で、日本列島出土では山陰の東端から畿内におよぶが、九州北部には数が少ない。

第四類＝「クリス形」：鎬が高いため身部が著しく厚く、短い茎部を有し、関の近く脊の左右に一对の孔があるもの。九州北部に局限。

鉄剣形については「石器時代に自発的に成生せりとの見解の可能性を認め得るにとどま」とした（高橋1925）。

上記の2つの論考は、日本列島出土の磨製石剣に対して、資料の集成を基に基礎的な分類、分布論を用いた最初の本格的な研究論文であるといえ、その後の朝鮮半島の磨製石剣研究にも影響を与えた（種定1990）。

おおよそ、戦前の研究は銅剣・銅矛といった青銅器研究が進められていくなかで、同様の分布をもつ石剣に対しても関心が向けられ、初歩的ではあるものの型式分類が試みられた時期といえる。

第2期：有光教一による磨製石剣に対する総合的研究と地域別資料の紹介（1950～70年代）

その後、戦後の磨製石剣に対する研究は、しばしの空白期間を経て1950年代に再度動きを見せる。

1953年に東亜考古学会の東方考古学叢刊として『対馬』が刊行された。磨製石剣については、戦前から知られていた資料も含めて7遺跡8点の事例に対し個々の出土状況と実測図・写真が提示された（東亜考古学会1953）。

1959年、有光教一は1930年代後半以降持続的に発表してきた朝鮮半島出土磨製石剣の基礎的研究をまと

める過程で、当該地域の磨製石剣の特徴をより明確にするために、日本列島出土の磨製石剣との比較を行った。そこでは、自身が提起した基部の形状による朝鮮半島出土磨製石剣の分類を、日本列島出土の磨製石剣にも適用させている（有光1959）。この点について、高橋健自による分類と大きな違いがなく、「日韓の磨製石剣を同列で論じることの困難さを露呈」したという評価がある（種定1990）。

また、同年には小田富士雄が佐賀県鳥栖市田代から発見された石剣と土器について報告を行った（小田1959）。ここでは磨製石剣と赤色磨研が施された土器の共伴事例が報告された。朝鮮半島での支石墓に見られる磨製石剣と副葬用の赤色磨研土器の事例を挙げて、両者間の交渉関係を指摘している（小田1959）。

その後の研究動向としては、1970年代末～1980年代初頭までは地域別、特に九州北部において出土した磨製石剣の紹介がなされ、日本列島におけるおおよその分布範囲の輪郭が明らかとなった（乙益1960；1980、松岡1962、永留1963、紅村1963、松岡1965、小田1970；1973；1978、岩田1974、清水1979、下條1979、愛媛県1982）。

これらと時期を同じくして、甲元眞之による朝鮮半島磨製石剣に関する一連の論考が発表された。有茎式石剣について、樋の有無によって祖型が異なるとし、有樋のものは河南省瑠璃閣第111号墓や洛陽中州路第2415号墓出土品といった中国の柱背式銅剣、無樋のものは長安張家坡 206 号墓出土銅剣と関連するとした。また、有茎有樋式と有茎無樋式が共存するとした（甲元1972a）。有柄式石剣については細形銅剣を模倣したものとし、樋の有無は時間差ではなく共存するものであり、先行する有樋・無樋有茎式石剣とつながるものであるとした（甲元1972b）。

1974年に刊行された『対馬』報告書の中で、小田富士雄は対馬出土磨製石剣の集成とともに、甲元眞之による磨製石剣の分類と編年を引用し、その年代について「（筆者注：中期後半から後期中頃までの）輸入青銅器と同じ時期かそれ以前から副葬品として青銅器とほぼ同じ意義をもって使用された」と考え、輸入青銅器との分布の重なりから、磨製石剣の多くが朝鮮半島製であろうと指摘している（小田1974）。

この時期、特に1960年代後半以降、朝鮮半島における青銅器時代文化研究の進展を受けて、なかでも甲元眞之による一連の朝鮮半島磨製石剣の研究成果（甲元1972a・b；1973）は、日本列島出土磨製石剣の型式、編年、年代を理解しようとする動きに大きな影響を与えたといえよう。

第3期：日本列島出土磨製石剣に対する本格的な分類・変遷提示（1980～90年代）

1980～90年代になると、日本列島出土磨製石剣の研究において重要な論考が発表された。

まず、武末純一による研究がある。そこでは朝鮮半島磨製石剣研究の成果、特に、有光教一と甲元眞之の見解を批判的に検討しつつ、「型式論が先に立ち、特に土器の検討が充分になされていない」ことを指摘し、朝鮮半島・日本列島出土の有柄式石剣に対し、柄部の形状を基に分類した。また、当時まで知られていた日本列島出土磨製石剣の集成を行い、共伴遺物による年代、有柄式石剣の分布とその意義づけを行った。結果、有柄式石剣は縄文晩期に有段柄型が北九州に、前期前半には無段柄型が盛行するとした（武末1981；1982）。

また、柳田康雄は甘木市出土の磨製石剣について言及するなかで、有節柄式石剣について中国式銅剣との関連性を強く意識した年代観を提示している（柳田1982）。

ちょうど1980年代後半には朝鮮半島で蓄積された磨製石剣資料を基に、既存の磨製石剣研究、特に型式分類と編年に対する批判的検討を通して、分類と編年の枠組みをより具体化した研究が発表された。

1988年、田村晃一は既存の朝鮮半島磨製石剣研究が祖型を求めることに偏重していた点を批判しつつ、先行されるべき型式論的検討の重要性を説いた。型式分類については、有光が提起した柄部の形態による大別を基に、剣身の形態にも着目し、有茎式石剣を茎の長さとはかりの有無によって、有柄式石剣については柄部の形態と剣身の形態、樋の有無によって分けた（田村1988）。

1989年、沈奉謹も基本的な分類方法は有光教一の見解に沿っているが、増加した発掘資料を基に磨製石

剣の共伴遺物に対する検討を通して、磨製石剣の形態的变化を5段階に分けて提示した（沈1989）。

これらの成果は朝鮮半島出土の磨製石剣研究に寄与しただけでなく、日本列島出土の磨製石剣の出現時期やその変遷の考えるうえでも重要な役割を果たしていく。

この他に、長沼孝による日本列島出土磨製石剣の概要に関する論考（長沼1986）や西口陽一による日韓の磨製石剣の石材に対する言及がある。西口は日韓出土磨製石剣のうち、白黒の縞模様を有する磨製石剣の石材として対馬で産出する若田石と呼ばれる頁岩が使用された可能性を提起した（西口1986）。

そして、もう一つの重要な研究が、1991年の下條信行の論考である。縄文晩期から弥生前期の武器形石製品に対する言及のなかで磨製石剣について論じている。有柄式石剣の柄、特に「把握時の難易」を基にI～V型に分類し、柄を把握しやすいものから困難なものへと展開したと考え、日本列島出土有柄式石剣の変遷過程と所属時期をより具体的に提示した（下條1991）。また、1994年には九州北部から瀬戸内海へ伝わった有柄式石剣に対する論考を発表した。瀬戸内海に面する地域から出土した9点を挙げ、その分布が集中する地域と散漫な地域が交互に存在するとし、四国北岸に沿った初期農耕文化の伝播ルートを想定した。また、用途については、副葬用、海洋祭器、埋納品として用いられたとみた（下條1994）。

1995年、設楽博己は長野県松本市石行遺跡出土の剣身に木目状の縞模様を有する磨製石剣片をとりあげ、類似する西日本の資料との比較を通して、東日本への磨製石剣流入の契機と意義について、水稻農耕開始期における西日本との相互交流の可能性を論じた（設楽1995）。

第4期：弥生時代暦年代研究の素材としての磨製石剣、副葬風習研究の進展（2000年代以降）

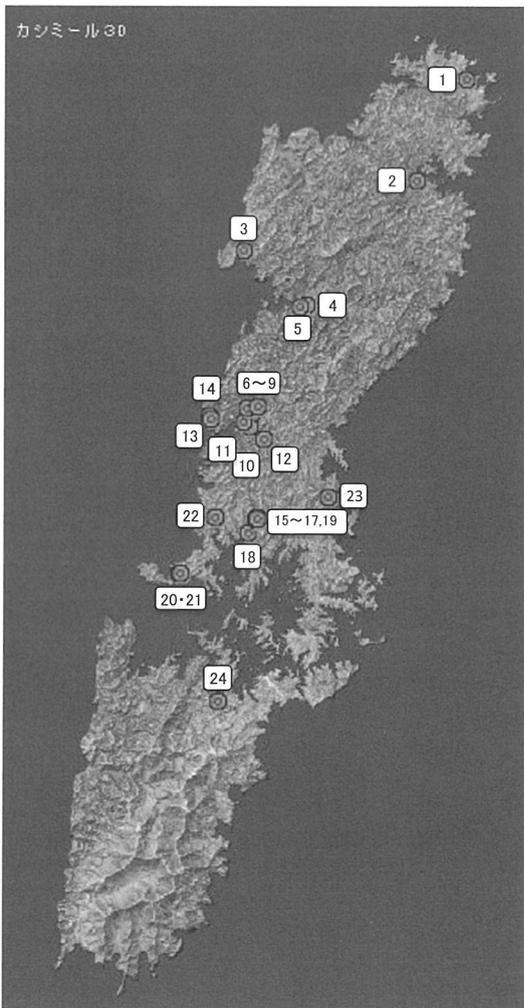


図1 対馬出土磨製石剣分布図

2003年の国立歴史民俗博物館によって発表された弥生時代の実年代、特に、弥生開始期の年代を巡る諸論議が進む中で、弥生時代の暦年代を考えるうえでの重要な資料として、朝鮮半島・日本列島出土磨製石剣が組上に挙げられ、論じられた（武末2004、柳田2004、岩永2005）。

2004年、中村豊は「弥生祭祀」の道具としての磨製石剣という観点から、「縄文祭祀」の道具とする結晶片岩製石棒との比較を行った。西日本東部では結晶片岩製石棒、西日本西部では有柄式石剣が主要な「祭祀」具であったとし、この両者が並存する中部瀬戸内地域や松山平野のような地域については、「あらたな精神文化導入にたいする試行錯誤」の状態を示しているとした（中村2004）。

2004年に朴宣映は朝鮮半島出土有柄式石剣に対する分類を行い、共伴遺物による型式変遷の妥当性を検討し、既存の有柄式石剣の型式分類案・編年案変遷をより具体的に提示した（朴宣映2004；2009）。その成果は日本列島出土磨製石剣の変遷・出現時期等に対する理解を深めるうえで重要な役割を果たすこととなる。

磨製石剣の主用途であったと考えられる副葬についての論考も朝鮮半島での事例を含めて考察し、弥生時代開始期の文化伝播・受容といった視点からの研究も発表された（中村2006、山崎2009、宮本2012、端野2015）。

上記のように、日本列島出土磨製石剣に関する研究は、日本考古学の開始時期から始まっており、長い歴史を持つ

ものといえる。その直接的な起源地である朝鮮半島での磨製石剣に関する調査研究の流れと併行しながら研究が進んできた点も特徴といえる。特に、大陸系磨製石器の一種として磨製石剣を把握し、弥生時代の開始期に朝鮮半島から流入した物質資料であり、単なる剣形の石器とみなすのではなく、朝鮮半島青銅器時

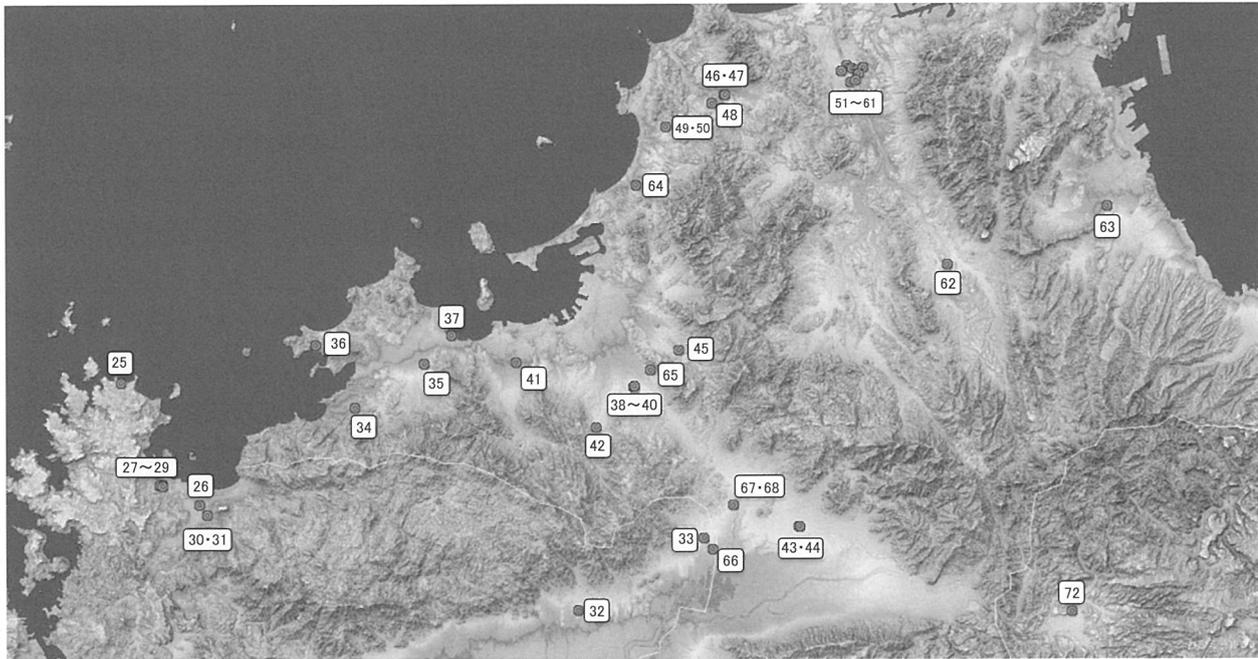


図2 九州北部出土磨製石剣分布図

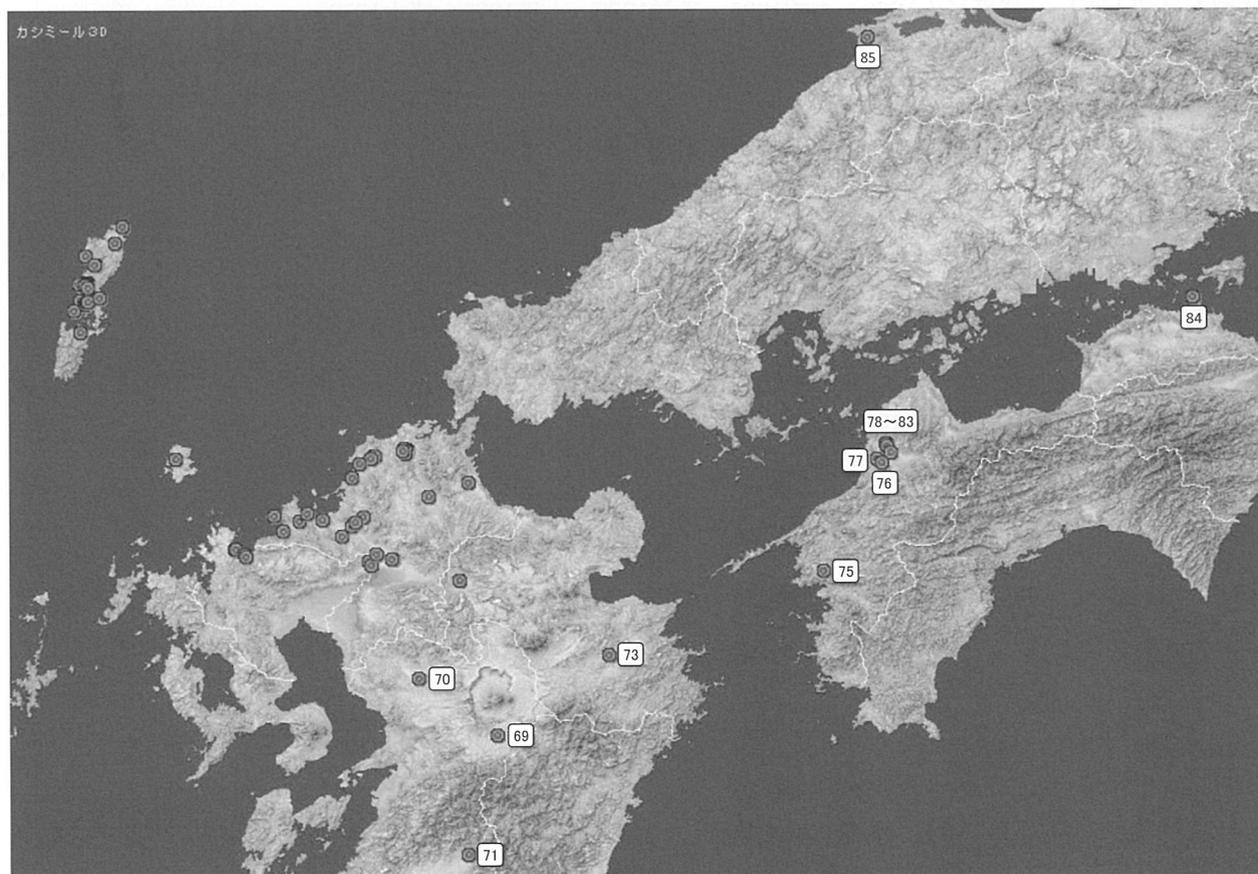


図3 日本列島出土磨製石剣分布図（縄文晩期～弥生前期）

代文化の一要素である「武器形石器」として、その機能、具体的には副葬品・副葬風習についても論じられてきた。

3. 日本列島における磨製石剣の出土現況

(1) 出土地域

2017年3月時点で確認できた縄文晩期～弥生前期の磨製石剣は85点ある。以下、県別の出土様相について調べてみよう。まず、長崎県では、対馬で20遺跡24点と、縄文晩期から弥生前期出土磨製石剣の28%が対馬で出土していることになる。点数のみ見れば、福岡県よりも少ないが、一地域への集中分布という点では最も高い密度をなす。さらに対馬島内での分布を見ると、美津島町の中道壇遺跡以外は島の北半部、それも西海岸側から偏重して出土している。上対馬町泉出土品と同町舟志出土品は、他の磨製石剣とは分布を異にして北東部から出土している。

壱岐でも3点の磨製石剣片が存在するが、所属時期の分かるものが少なく、原の辻出土品を中期初頭としている（長崎県教育委員会1988）。

長崎県の九州島側でも磨製石剣が見られる。確実な有柄式はなく、有茎式のみが平戸市、佐世保市、諫早市、南島原市、新上五島町で出土しているが、時期不明や中期以降のものである（藤田1988）。

佐賀県では6遺跡9点確認されている。点数は対馬や福岡に比べると少ないが、吉野ヶ里と永吉出土の2点以外は全て唐津市の唐津湾沿岸に集中分布している点の特徴といえる。

福岡県全体では35点確認されており、日本列島出土磨製石剣の41%を占める。福岡県内での分布はさらに細分できる。集中分布の度合いからみると、糸島平野とその周辺地域（5点）、福岡平野南部から小郡市におよぶ地域（11点）、玄界灘沿岸の宗像市（6点）、中間市の遠賀川流域兩岸（12点）にグループ化できる。

大分県・熊本県ではそれぞれ2点・3点のみ出土しているが、いずれも破片であり、出土状況に関して詳細な情報がない（浅野ほか1960、高橋1925、乙益1980、小田1970、清水1978）。

宮崎県にも西都市出土品があったとされるが、これも形態や出土状況に関する情報が不明である（武末1982）。

愛媛県は、対馬、九州北部以外で唯一磨製石剣が集中分布する松山平野がある。

松山平野以西になると磨製石剣は急減し、香川県旧庵治町沖の海中から引き上げられたものが唯一の資料となる（岩田1974）。

日本海側で前期に遡る可能性のある資料としては、出雲市原山遺跡出土品（村上・川原1979）がある。九州北部・松山平野から遠く離れた香川県・島根県では、単発的に出土している状況である。

日本列島出土磨製石剣について、下條は集中出土する地域と散漫して出土する地域が相互に存在し、集中する地域は初期農耕文化が展開していくルート上の要衝の地に限られるとした（下條1994）。

(2) 出土遺構

まず、日本列島出土磨製石剣の故地である朝鮮半島での様相について見ておこう。朝鮮半島での出土遺構は大きく2つに分かれる。ひとつは支石墓、石棺墓、周溝墓など青銅器時代墓制の副葬品として出土するもの、もうひとつは住居址からの出土である。出土点数でいえば、これまでの資料収集過程で把握したところでは墳墓出土品は700点近く、住居址出土品は600点近く、計1300点ほどになると思われる。住居址出土品は製作途中のものも見られるが完成品の破片が多い一方、墳墓副葬品には完形が多く、未成品はほとんど見られないという違いがある。

日本列島出土磨製石剣の出土遺構を見てみると、開墾中に発見されるなどして出土遺構・出土状況の分かるものは少ないが、箱式石棺、土壙墓、木棺墓などの埋葬遺構、住居址・貯蔵穴などの生活遺構、そして海中引き上げなどその他の特殊な例に分かれる。

遺構別の出土点数を見ると、埋葬遺構からは28点出土している。箱式石棺からの出土が15点と最も多いが、大友遺跡以外は対馬での出土である。

次に多いのが木棺墓であり、8点確認される。雑餉隈（3・11・15号）で3点、田久松ヶ浦SK206、久原SK8、寺福童R-8、横隈上内畑4次SR21、持田町三丁目SK32で各1点ずつ出土している。

土壙墓では鳥栖田代永吉、中・寺尾8号、持田町三丁目SK34から各1点ずつの計3点が出土している。生活遺構からは5点出土している。住居址出土例としては梅白遺跡で1点、曲り田遺跡で3点出土しており、いずれも未成品である。

貯蔵穴からの出土は横隈鍋倉42号貯蔵穴覆土から出土した無段式片1点のみである。

海中引き上げという特殊な状況での発見は庵治町沖出土品1点のみである。

出土遺構の分かるものに関して言えば、墳墓の副葬品として出土することが多いことを確認できる。朝鮮半島での出土様相と同様に、縄文晩期から前期の墳墓出土品は完形のものが多く、住居址や貯蔵穴出土品は未成品あるいは破片資料である点は共通しているといえる。

4. 日本列島出土磨製石剣の分類と変遷

研究史でも述べたが、1990年代以降、朝鮮半島で急増した磨製石剣、特に有柄式石剣について、明確な分類基準を提示し、共伴遺物による検証を通した編年案を提示した朴宣映の研究は、日本列島出土磨製石剣を理解するうえでも重要である。磨製石剣の分類と編年に関して、日本列島での独自の分類を提示するよりも、基本的な分類基準は朝鮮半島出土磨製石剣のものを適応させることで対応可能である。この点はやはり、日本列島出土磨製石剣が東北アジアの磨製石剣文化の流れの中に位置づけられるためであろう。

本稿では既存の型式分類基準のうち、武末純一・下條信行・朴宣映による分類基準（武末1982、下條1991、朴2004）を考慮して、柄部形態によって有柄式と有茎式に大別し、有柄式は①剣身と柄の連結形態、②鐔の位置によって、有茎式は①茎部の長さ、②茎部の挟りの有無によって細別する（図4）。

（1）有柄式石剣の分類

有柄式石剣は、柄の中央に挟りなどによって段のある有段柄と挟りのない無段柄に分けられる（武末1982）。

有段柄は段連結部の形状によって、段連結部の上下に節があるもの（有段1式）、帯状をなすもの（有段2式）、節のないもの（有段3式）、短い溝を入れるもの（有茎4式）に細別する（図5）。

無段柄も朴宣映が指摘しているように、最も重要な分類基準として剣身と柄の連結部が挙げることができる。そして、鐔部の突出が小さいものから大きなものへと変化することを述べている（朴2004）。本稿でも剣身と柄の連結形態を基に、剣身と柄の境が節状をなすもの（無段1式）、段状をなすもの（無段2式）、鐔がなく平坦なもの（無段3式）に細別する（図6～8）。

（2）有茎式石剣の分類（図9）

有茎式石剣の分類基準については、従来の研究においても茎部の長さ・幅、挟りの有無が重要視されてきた（田村1988、李1997、中村2012）。上記のうち、田村が設定した有茎1式、つまり茎が細く、長めに作られ、茎の末端近くに両側から小さな挟込みがはいるものは日本列島では見られないため、除外した。田村晃一や李栄文の分類案を基に、その後の増加資料も含めて分類した中村大介の案も参考に日本列島出土の有茎式石剣を以下の通りに分類した。

有茎1式：茎の長さが短く（2～3cm）、幅広に作られ、かつ両側から挟込みがはいるもの

有茎2式：茎の長さが短く（3～4cm）、挟込みのないもの

有茎3式：茎の長さが長く、関が鈍角をなすもの。

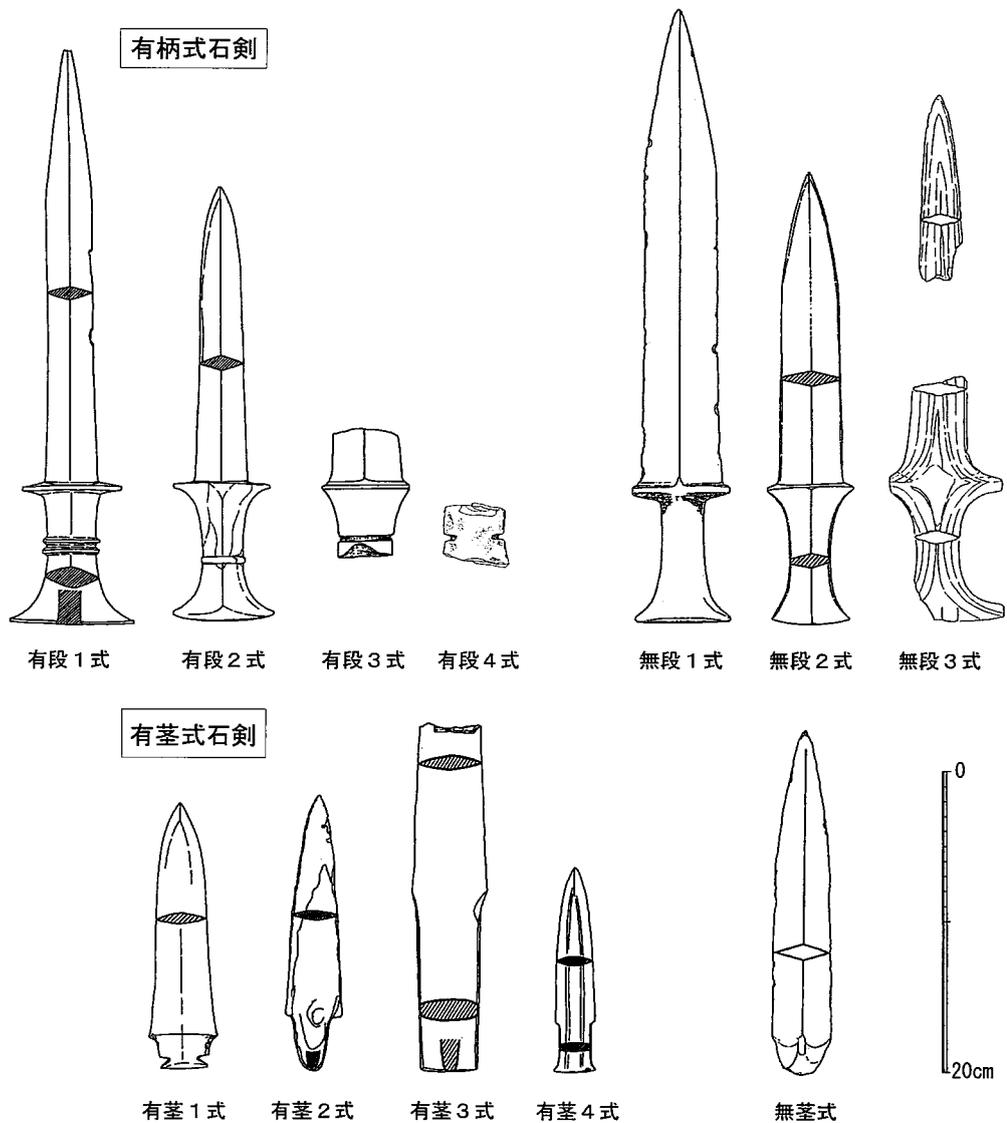


図4 日本列島出土磨製石剣型式分類図

有茎4式：茎部の段が減り、逆T字形をなすもの。

無茎式：茎部が無く、剣身のみのももの。

(3) 日本列島出土磨製石剣の変遷

ここではまず、各型式の時期比定を考えるために磨製石剣の共伴遺物について調べてみよう。

日本列島出土磨製石剣のうち、共伴遺物を有するものは9遺跡12例である。共伴遺物の種類には、土器、有茎磨製石鏃、玉があるが、磨製石剣の所属時期の定点を見出すには土器からの検討が有用であると考えられる。

磨製石剣と共伴した土器の事例としては、鳥栖市永吉、福岡市雑餉隈 (SR011・SR015・SR003)、宗像市田久松ヶ浦 (SK201・SK206)、小郡市横隈鍋倉、古賀市鹿部東町貝塚の5遺跡8点が確認され、墳墓の副葬品が主をなし、この他には貯蔵穴・貝塚からの出土がある。

永吉で共伴した土器は小型の丹塗磨研土器壺で、厚手の作りを見せ縄文時代晩期に位置付けられる(武末1982)。より具体的な時期については、底部の形態が丸底をなすため、夜臼Ⅰ式まで遡る可能性も提起されている(端野2012)。

雑餉隈で共伴した土器についてはそれぞれSR011・SR015出土品を夜臼式、SR003出土品を夜臼Ⅱaとし

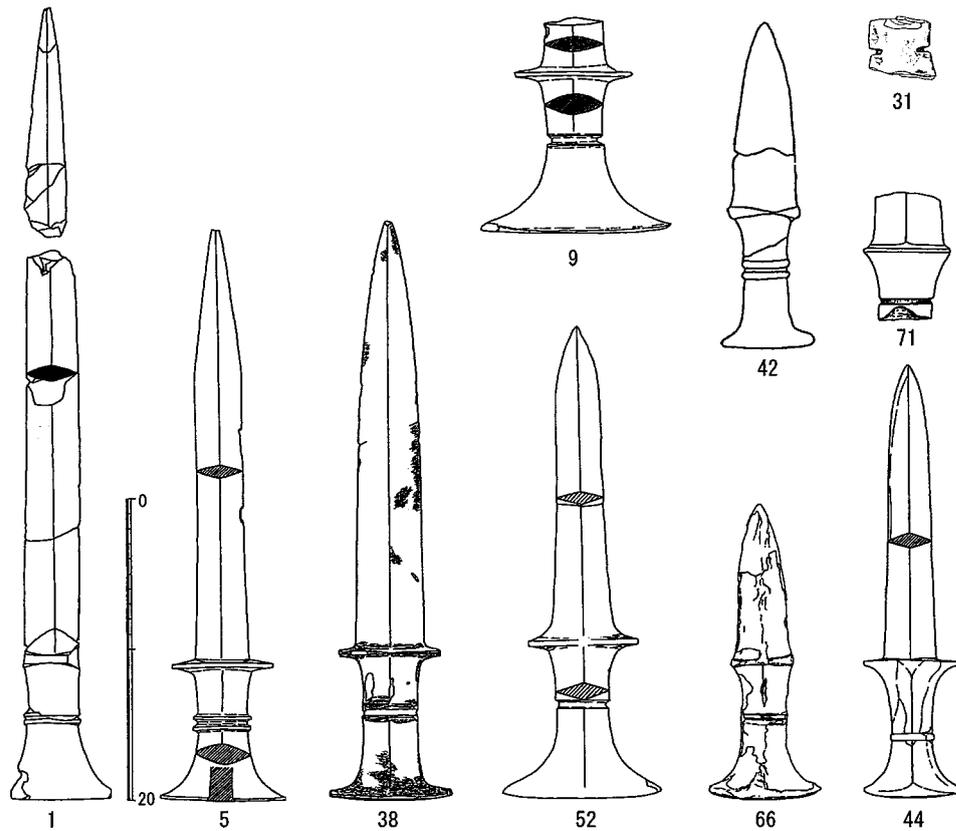


図5 有柄有段式石剣（番号は一覧表と対応）

ている（福岡市教育委員会・岡三リビック（株）埋蔵文化財調査室2005）。端野晋平は雑餉隈出土磨製石剣の時期について、夜臼Ⅱa式が本稿分類の有段1式磨製石剣の出現期になるとはかぎらないとし、それ以前に日本列島出土での製作が開始されていた可能性を提起している（端野2012）。

中間垣生遠賀川河床出土品について、武末は縄文晩期後半～板付Ⅰ式に伴う古式の有茎石鏃と共件しており、有段式のなかでも新式に位置付けられると指摘している（武末1982）。

田久松ヶ浦（SK201・SK206）出土土器は板付Ⅰ式に該当する（宗像市教育委員会1999）。

横隈鍋倉では貯蔵穴から板付Ⅱ式と共件し（小郡市教育委員会1985）、古賀市鹿部東町貝塚で出土した磨製石剣は、板付Ⅱa式を主体にした層からの出土とされている（下條1978、木村・高橋1978）。

久原SK8については、この遺構を含む墳墓遺構全体の時期について、板付Ⅰ（新）～板付Ⅱaとされている（宗像市教育委員会1988）。

太田原丘遺跡1号石棺出土石剣の時期については、鏑や柄頭が他の石剣よりも誇張されている点や、類似する形態を持つ朝鮮半島側資料の共件遺物から板付Ⅱ式期が想定される（武末1982）。

有茎式石剣のなかで共件遺物や出土層位から時期を比定できるものは菜畑遺跡7～8層出土有茎1式の夜臼式期（唐津市教育委員会1982）、梅白遺跡SH239出土有茎2式の板付Ⅰ式期（佐賀県教育委員会2003）である。持田3丁目遺跡出土品の場合、時期比定のできる共件遺物はないものの、同一墓地内における土壙墓の構築順序からSK32出土有茎2式が前期前半新段階、SK34出土有茎3式は前期後半新段階とされる（愛媛県埋蔵文化財調査センター1995）。なお、SK34出土磨製石剣の石材は、松山平野で産出する緑泥片岩であり、現地で製作されたことが分かる（下條1994）。

上記のように共件した土器などからみると、縄文晩期に有段1式、無段1式、板付Ⅰ式期に無段2式・有茎2式、板付Ⅱ式期に無段2式と無段式のうちで柄頭が左右に広がるもの、有茎3式が見られることが分かる。この点は、1980年代・90年代以降の資料増加にも関わらず、時期別の型式の特徴については従来

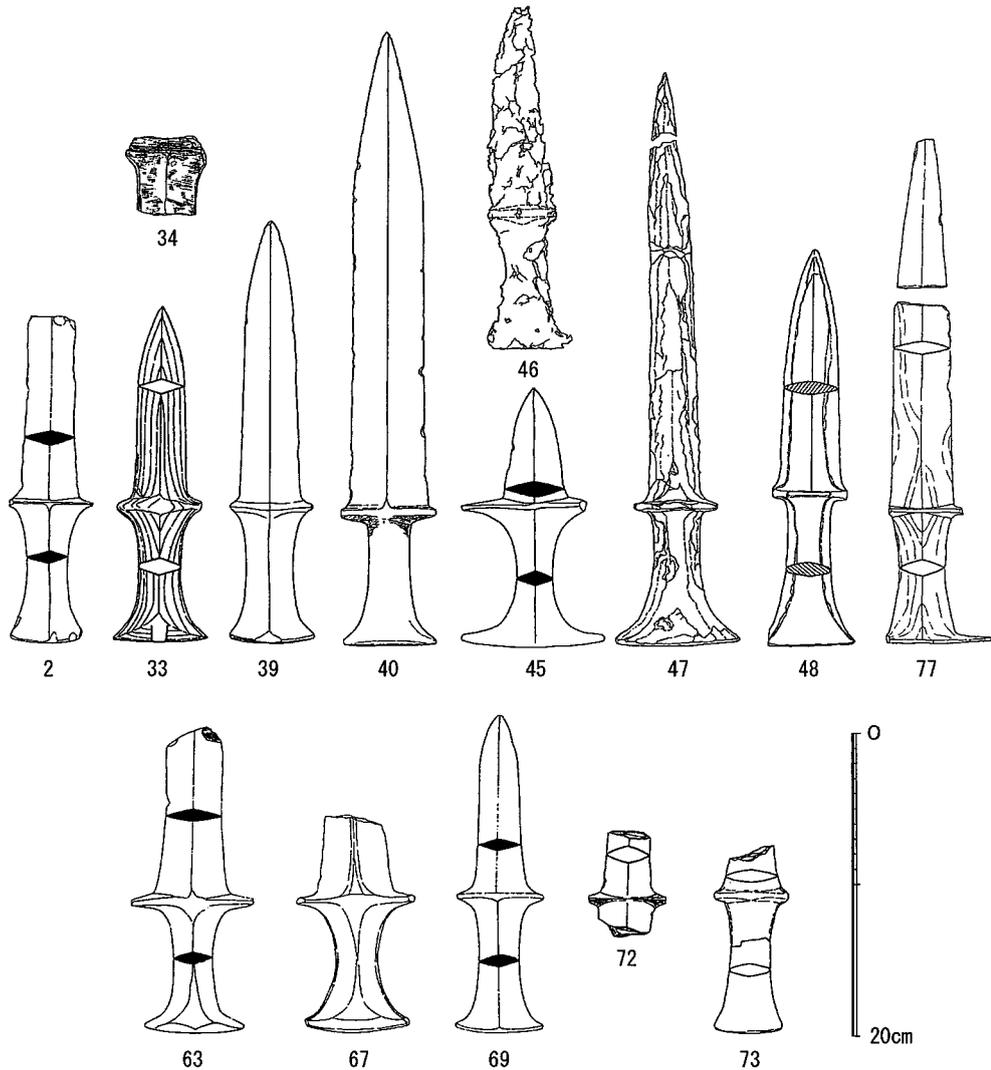


図6 有柄無段1式石剣（番号は一覧表に対応）

の見解（武末1982、下條1991）と大きく変わらず追認する結果となったが、その内容を図10に示した。

（4）日本列島における磨製石剣の出現時期について

ここで注目したいのは、日本列島出土磨製石剣で最も時期が古いと考えられる有段1式である。いわゆる有節柄式石剣と呼ばれるもので、朝鮮半島でも集中分布する地域が限定される石剣である。柄の段連結部の上・下に帯状の節を持つものを有節柄式とするが、朝鮮半島青銅器時代の前期末から後期後半（先松菊里式土器～松菊里式土器段階）にかけて製作・副葬された。この有節柄式石剣は剣身部の形態、鑄の形成位置、柄頭部の広がり具合をもとに4つの型式に細分できる（張・平郡2009）。このうち、日本列島出土の有段1式との関係性がうかがえるのは、有節柄Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式であり、各々の形態的特徴は以下のとおりである。

有節柄Ⅱ式は剣身が鏝部から直線的に伸びて、鋒部付近で角をなして尖り、鑄は剣身部にのみみられる。段連結部は凹部が明確なものが多い。

有節柄Ⅲ式は柄部の長さに対する剣身部の長さの比率がⅡ式に比べて大きくなる。剣身部の形態は柄部から直線的に伸びて鋒部付近で角をなして尖る。鑄は剣身部と柄部全体に作られる。

有節柄Ⅳ式は明確な鏝部が形成されておらず、左右に大きく突出しない。鑄は剣身部のみにあるものが多い。

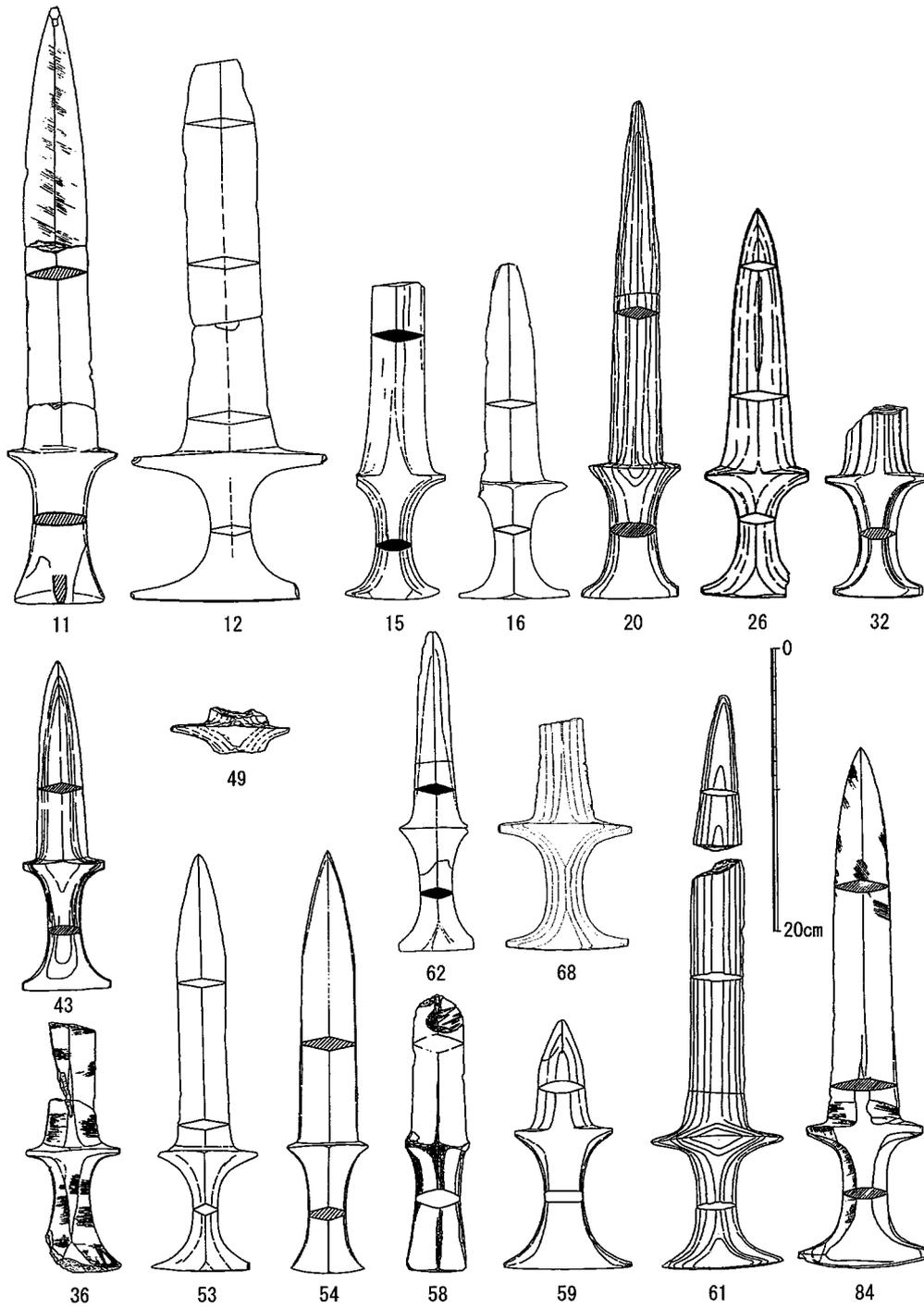


图7 有柄無段2式 (番号は一覧表に対応)

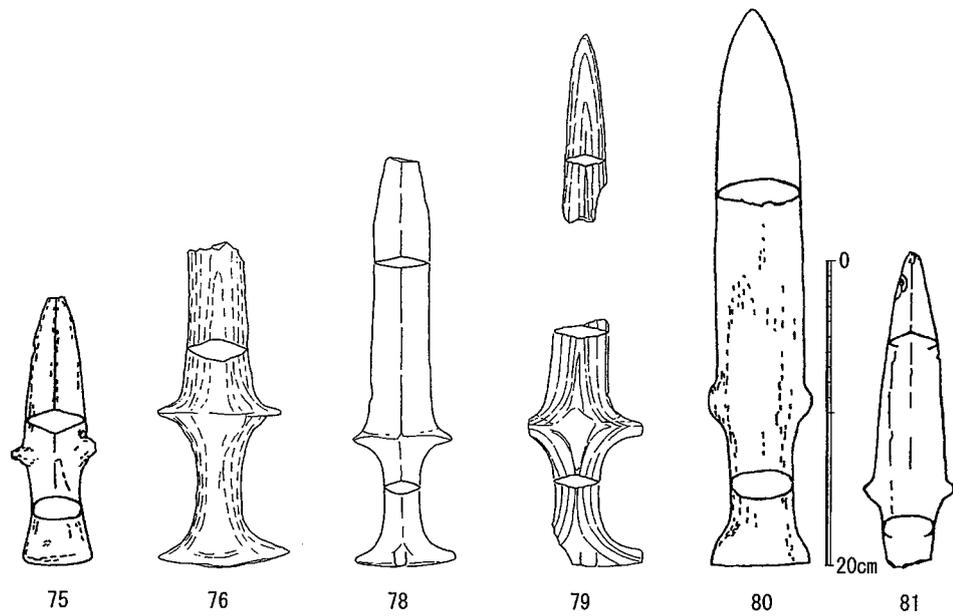


図8 有柄無段3式石剣（番号は一覧表に対応）

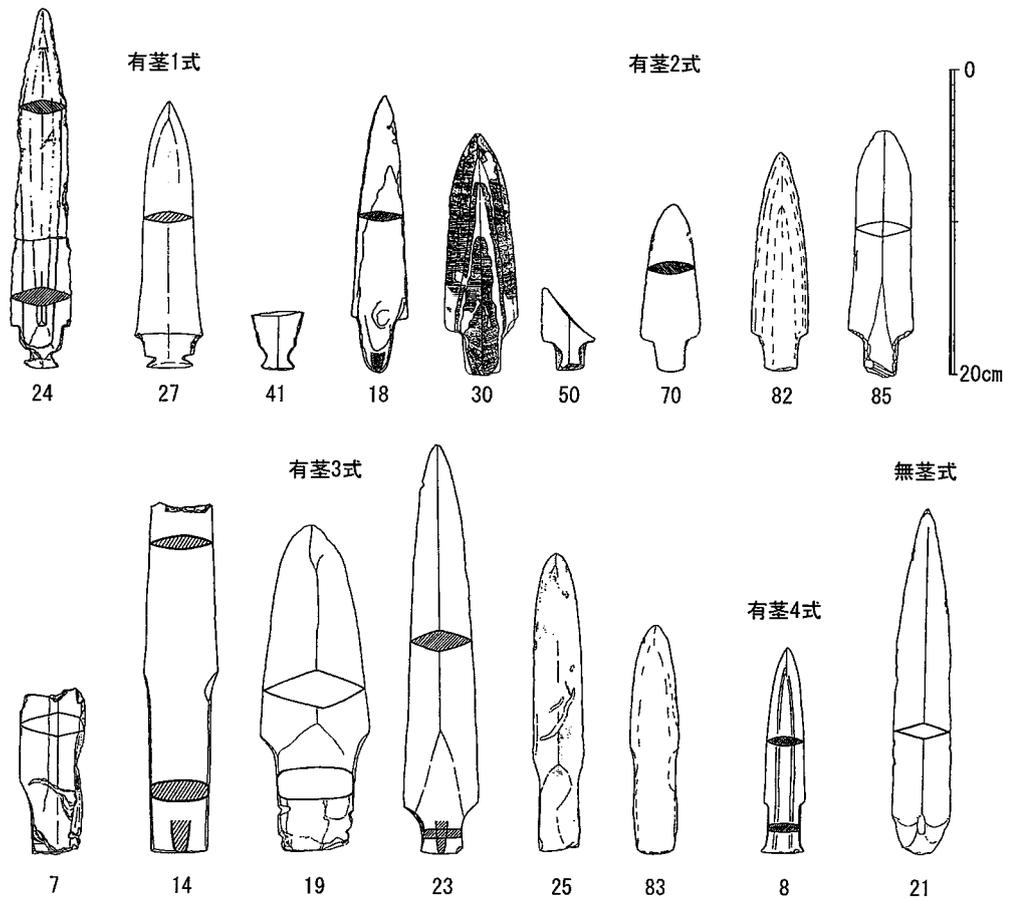


図9 有茎1～4式石剣・無茎式石剣（番号は一覧表と対応）

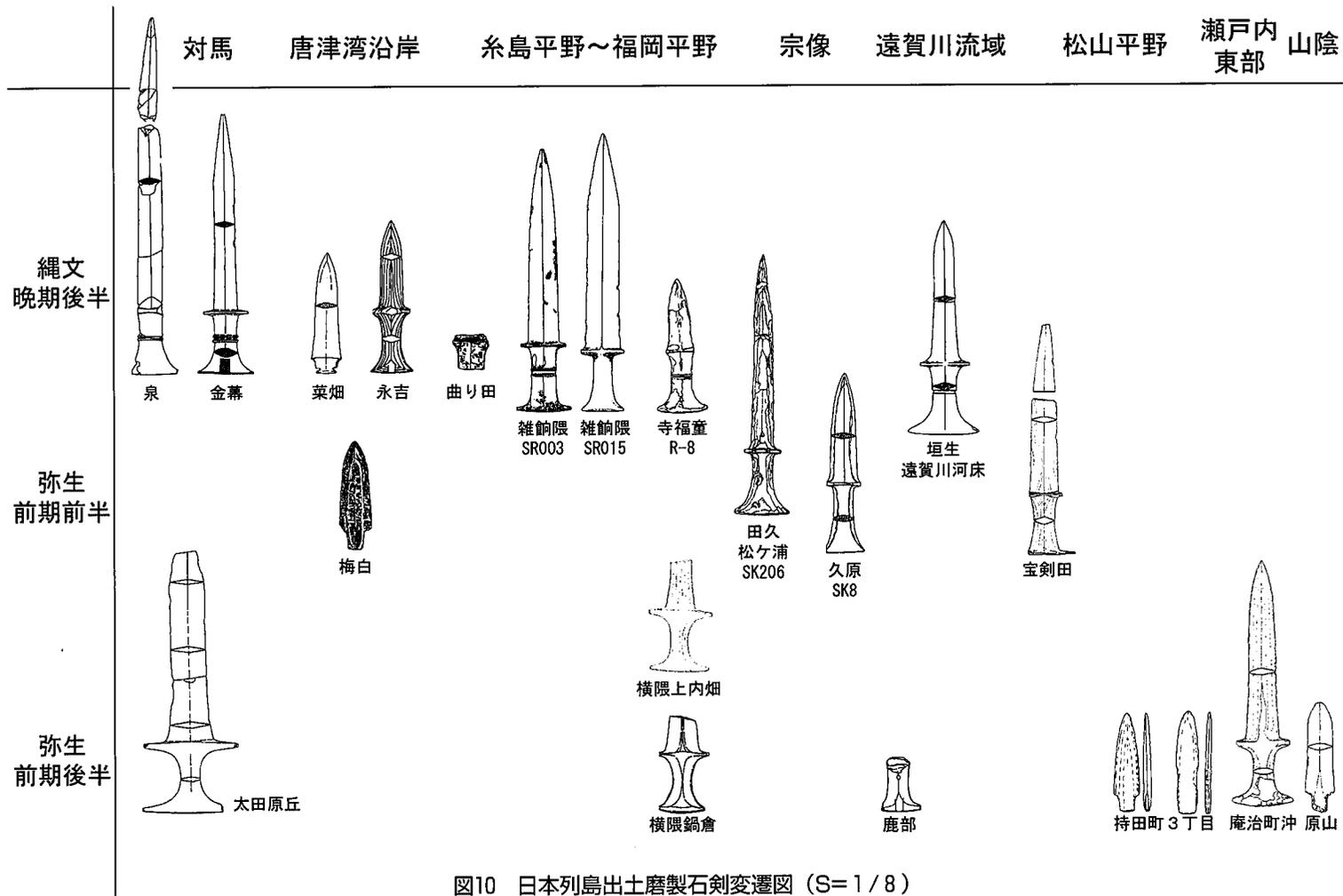


图10 日本列島出土磨製石劍變遷圖 (S=1/8)

次に、日本列島出土有段1式のなかで、上記した朝鮮半島出土の各種有節柄式と類似性を見せる資料について見てみよう(図11)。

泉出土品は鏑部の突出が少なく、鏑が剣身部にのみある点で、他の日本列島出土有段1式石剣とは異なる特徴を持つ。形態上の特徴からみて朝鮮半島の有節柄Ⅳ式に近く、類似する資料としては昌原市花陽里出土品(鄭1985)を挙げることができる。このⅣ式は朝鮮半島東南部の大邱広域市、馬山市、昌原市、慶州市に集中分布するものである(張・平郡2009)。

ガヤノキ出土品は柄部と剣身の一部のみ残っているが、柄部の形態は有節柄Ⅱ式に該当する大邱時至洞Ⅰ-15号墓出土品との類似性が高い(嶺南大学校博物館1999)。ガヤノキ出土品の柄部上段には鏑があり、剣身部にのみ鏑のある有節柄Ⅱ式とは違いを見せる。Ⅱ式とⅢ式の間隔的な形態を持つものといえる。

金幕出土品は節の突出が強い点是有節柄Ⅱ式に該当すると考えられるが、鏑が剣身部だけでなく、柄全体におよんでいる点是有節柄Ⅲ式の特徴である。これもⅡ式とⅢ式の間隔的な形態を持つものといえる。段連結部の長さにおいて違いがあるが、大邱時至洞Ⅰ-3号石槨墓出土品が類似する(嶺南大学校博物館1999)。

垣生遠賀川河床出土品の形態は有節柄Ⅱ式の大新洞出土品(有光1959)と類似するが、垣生出土品の節の突出度が低く、鏑が柄全体におよんでいる点是有節柄Ⅲ式の特徴を見せる。Ⅱ式とⅢ式の間隔的な形態を持つものである。このような2つの型式の特徴を併せ持つ石剣は朝鮮半島でも出土しており、有節柄Ⅱ式からⅢ式へ連続的な型式変化を見せている(張・平郡2009)。

雑餉隈SR003出土品は柄部下段の屈曲の強い点異なるが、柄部の側面が直線的である点是有節柄Ⅲ式の平澤土津里出土品と類似する(畿甸文化財研究院2006)。雑餉隈遺跡の場合、有段1式ではないが、SR015出土品のような無段1式が論山麻田里遺跡の石槨墓から出土した磨製石剣と酷似するという指摘がある(庄田2016)。具体的な資料としてはKM008出土磨製石剣が該当するものと思われる(李弘鍾・朴性姫・李僖珍2004)。

時期の問題については、日本列島出土磨製石剣のなかで最も時期が遡るとされるのは対馬の泉出土品である。この石剣が出土した箱式石槨から3~4m離れた別の石槨から縄文時代晩期の甕棺と碧玉製管玉が出土したことから、この2つの石槨を同時期としているが(東亜考古学会1953)、この時期比定については慎重を期すべきという指摘がある(武末1982)。共伴遺物が不明なため、詳しい時期比定はできないが、有段1式であるという点は日本列島出土磨製石剣の中でも古い時期に属するものと考えたい。泉出土品との関連性が想定される朝鮮半島の有節柄Ⅳ式は、他のⅠ・Ⅱ・Ⅲ式とは鏑部の形態が異なる点や分布地域が限定されている点、そして鏑が剣身部にのみ見られるため、Ⅰ・Ⅱ式に並行する時期の地域差を示す可能性があり、朝鮮半島の有節柄式石剣がⅠ→Ⅱ→Ⅲ式へと変遷する点(張・平郡2009)を考慮すると、泉出土品は他の有段1式よりも時期的に遡る形態を有していると考えられる。また、ガヤノキ・金幕・垣生遠賀川河床出土品がいずれも朝鮮半島の有節柄式のうちⅡ式とⅢ式の間隔的な形態をみせることは、これら3点の製作時期に大きな時間差がないことを示していると考えられる。

以上のように、対馬や中間市で出土しているものは朝鮮半島でも嶺南地域出土の有節柄Ⅱ・Ⅲ式(=有段1式)と、福岡平野出土のものは朝鮮半島中西部の京畿道・忠清南道出土品との類似性が想定できる。また、菜畑遺跡出土品のような有茎1式は、宝城郡竹山里夕群16号墓出土品のように朝鮮半島でも西南部の全南地域で出土している。朝鮮半島から日本列島への磨製石剣の流入ルートや起源地が必ずしも一元的であるとは限らず、多元的である可能性を指摘しておきたい。

5. 日韓出土磨製石剣の副葬風習の比較

磨製石剣という石器のみが朝鮮半島から日本列島へ伝わったのではなく、磨製石剣を用いた副葬行為あるいは磨製石剣が有していたと想定される祭祀具としての性格なども含めて、大陸系磨製石器のひとつと

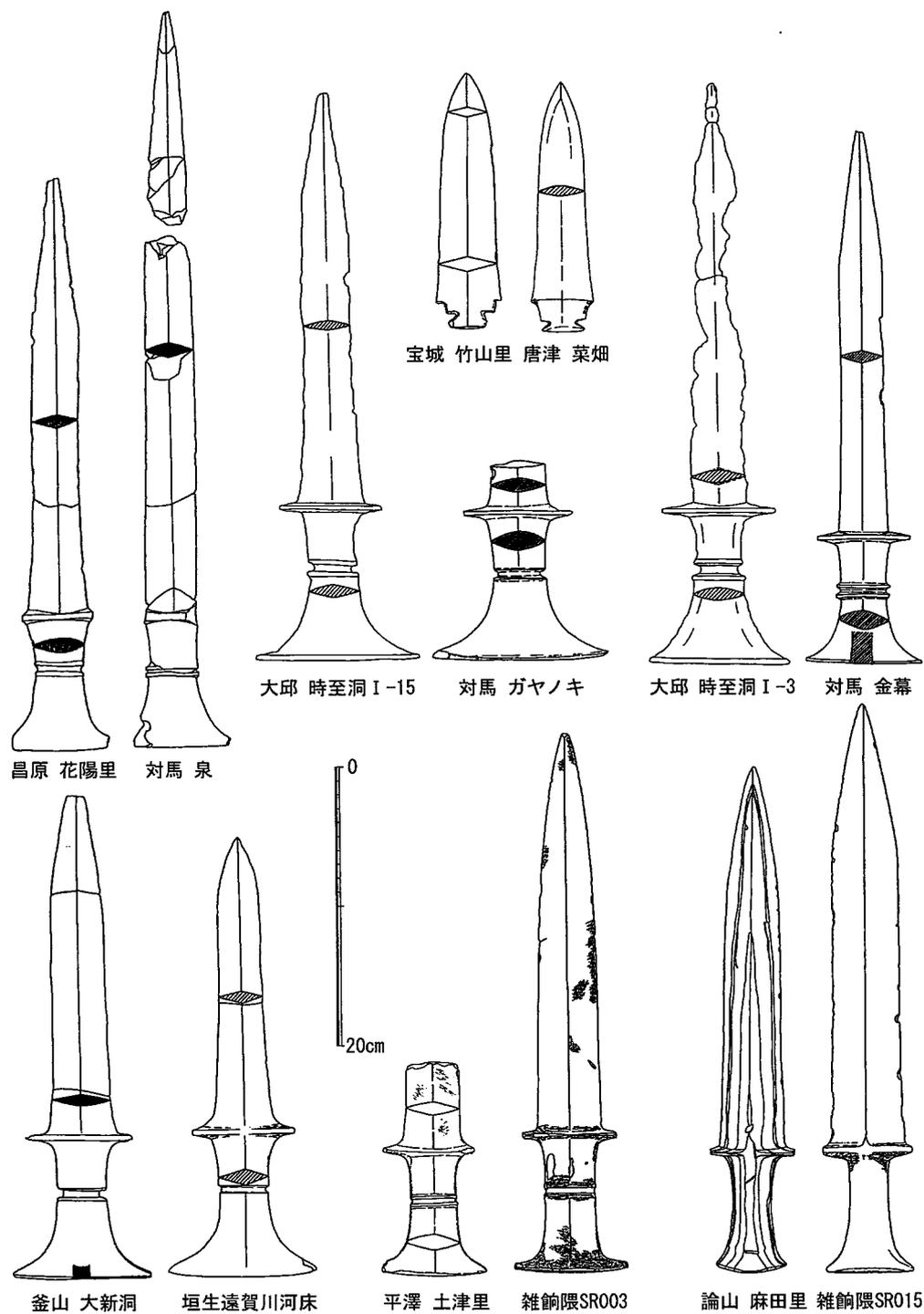


図11 日韓間で類似する有柄有段・無段式・有茎式石剣

して伝播したことは先学によって指摘されてきた(下條1994、中村2004)。ここでは副葬遺物としてのセット関係や副葬位置について、朝鮮半島の事例との比較を行い、両者間の関連性について考えてみる。

朝鮮半島の慶尚南道で確認された青銅器時代墓制での副葬遺物のセット関係は以下の通りである(平郡2006)。発掘調査を通して確認された青銅器時代墓制550基のうち、102例で棺内棺外を問わず副葬行為が見られる。そのうち、石剣と関連した副葬遺物のセット関係は、石剣+石鏃+土器15例、石剣+石鏃5例、石剣+土器4例、石剣のみ10例が確認される。最も多いのが、石剣+石鏃+土器のセットであり、より具体的に見ると、磨製石剣1点、磨製石鏃複数点、赤色磨製土器というセット関係である。

日本列島での様相をみると、石剣+石鏃+土器4例(雑餉隈SR015・SR003、田久松ヶ浦SK201・SK206)、石剣+石鏃2例(寺福童R-8、久原SK8)、石剣+土器2例(永吉、雑餉隈SR011)、石剣+管玉2例(横隈上内畑4次SR21、中道壇4号石棺墓)が確認される。また、中間垣生遠賀川河床出土品については、出土状況が不明であるが有茎磨製石鏃が伴っていた可能性が高い。

比較事例の数が少ないものの、副葬風習において雑餉隈SR003・SR015や田久松ヶ浦SK201のように磨製石剣1点+磨製石鏃複数点+(赤色磨研)土器というセット関係を見せている点は、朝鮮半島南部との高い類似性を見せる。

副葬行為についてみると、山崎頼人は九州北部における石製武器の副葬について、石剣のみならず石鏃も含めて副葬事例に対する詳細な検討を行った。磨製石剣が1遺構で1点出土し、被葬者の右側から鋒を足元に向けていることから佩用と属人性を意識して副葬されているとした(山崎2009)。

副葬位置を見ると、埋葬主体部の長辺に沿った中央から出土するものとして、中道壇4号石棺墓、雑餉隈SR015・SR011・SR003、寺福童R-8、久原SK8、田久松ヶ浦SK206の7例がある。また、埋葬主体部の長辺に沿った短壁寄りから出土するものとして、横隈上内畑4次SR21、田久松ヶ浦SK201の2例がある。この他に、棺外から出土したものは大友遺跡3次1号石棺墓の事例が唯一である。

日本列島出土の磨製石剣の副葬位置についてみると、埋葬主体部の長壁に沿った中央から出土するものが多く、この点も朝鮮半島での基本的副葬パターンと類似する。

副葬に関していえば、完形品が納められることが多いが、横隈上内畑のように剣先が欠損したものもある。木棺墓の棺底より出土したため、後世の攪乱等によって副葬品であった石剣も破損したというような状況ではない。実際の武器としての機能を有していないにも関わらず、副葬品として納められていた。このような磨製石剣副葬の意義について、後藤直は「武器として他の共同体との交渉における優位を獲得する力、人々を結集させる力、共同体を害する諸々の邪悪を払う力の象徴物であり、死後にも不可欠のものとして副葬される必要」があり、「武威を含蓄する儀礼、言説」によって当時の社会における諸問題の解決が行われたとした(後藤直2000)。後藤の指摘は朝鮮半島での副葬磨製石剣に対するものであるが、日本列島出土の磨製石剣の出土状況を考慮すると剣が持つ象徴性つまり、「武威」の概念が依然として残っていたものと考えられる。

この他に対馬加志々出土の無茎式石剣や原山遺跡のように淡い黄燈色を呈する石材で縞状文様が見られるものも注目される。

対馬加志々出土品の場合、無茎形に分類したが、剣身下部の一方の面には打ち欠きの痕跡が見られる点、もう一方の面には石剣の下端部まで丁寧な磨研が施されている点から折れた剣身を再加工し、茎部を作ろうとしていた可能性を指摘できる。鋒に近い部分で明瞭ではないものの角をなして鋒に向かって尖る剣身形態は、長身化した有段1式のような磨製石剣の剣身であったことを推測させる。

原山遺跡出土品も折れた剣身を再加工した可能性がある。縞模様があらわれる淡い黄燈色を呈する石材は山陰地域では見られないものである。茎部にも磨研が施されることが一般的であるが、茎部の側面と底面を打ちかいたままの状態であり、茎部が未完成であり製作途中のような印象を与える。刃部が関に近いところでやや広がっている点は、柄部に近い剣身部を再加工した可能性を示唆している。

この両者は出土遺構や共伴遺物について詳細な情報がなく、時期比定が困難であるが、朝鮮半島の磨製石剣との類似性を持つものは、日本列島では前期後葉を最後に見られなくなるため（下條1991）、加志々や原山もその時期を大きく外れないものと考えられる。折れた磨製石剣の剣身部を再加工して有茎式石剣として使用しようとしている点は、朝鮮半島からの磨製石剣の流入が途絶え、それ以上の供給がなされなかったこともあろうが、依然として石剣が有する「武威」の象徴性が維持されていたためと考える。

6. 結語

以上で、日本列島出土の磨製石剣について、既存の研究成果をふまえて再検討を行った。

日本列島において磨製石剣は縄文時代晩期後半に、有段1式がまず対馬で副葬品として納められた。有段1式のなかでも、共伴遺物が明確ではないものの朝鮮半島出土品との比較から泉出土品を最も古いものと考えた。この他にガヤノキ・金幕・垣生遠賀川河床出土品がいずれも朝鮮半島の有節柄式のうちⅡ式とⅢ式中間の形態をみせることは、これら3点の製作時期に大きな時間差がないことを示していると考えられる。

対馬から九州島への玄関口と考えられる唐津湾沿岸には、対馬で見られるような有段1式は見られず、有茎1式が最も古い石剣となり、筑紫平野では永吉出土品のような無段1式が最も古い石剣として副葬された。

福岡平野では夜臼Ⅱa式段階に雑餉隈SR003出土品のような有段1式が副葬される。磨製石剣はこの時期に新たに出現する木棺墓の副葬品として、他の副葬遺物のセット関係や副葬位置は朝鮮半島のそれと高い共通性を見せており、単なる物品のみの伝播ではなく、葬送儀礼を含む制度の伝播を物語る。有段1式は弥生時代前期の小郡市寺福童R-8号木棺墓、中間市遠賀川河床出土のものが最も新しいものとなり、これ以降見られなくなるとともに遠賀川以西では出土していない。

弥生時代前期には、宗像市や中間市など玄界灘沿岸・遠賀川流域にも無段1式が見られる。共伴遺物や出土遺構がはっきりとしないが、九州北部で見られる無段1式が四国西北部でも出土するようになる。

板付Ⅱ式段階になると、無段2式が見られるようになるが、板付Ⅰ式期の分布範囲をほぼ維持しつつ、松山平野でも出土数が増加し、前期後半には持田3丁目遺跡SK34出土有茎3式のように、在地で石剣製作が行われた（下條1994）。出土状況や共伴遺物が不明ではあるが、石剣の形態から香川や島根での散発的な分布も前期後半の時期を大きく外れるものではないと考えたい。そして、前期後半以降、日本列島出土において朝鮮半島磨製石剣の直接的影響を受けた磨製石剣は見られなくなる。

出土遺構の確実なものが少ないが、その多くは埋葬遺構から副葬品として出土している点は、朝鮮半島での本来の用いられ方と同様である。ただ、朝鮮半島からの渡来文化の一つとされる支石墓からはこれまでのところ確実な出土品が1点もない点は注意されよう。その意味については別の機会に考えることとしたい。

磨製石剣の石材についての言及もできなかった。この点については自然科学からの検討も交えて他分野との共同研究によって進めていく必要があるだろう。

謝 辞

本稿作成に当たって多くの方々のご協力を得た。記して感謝いたします。

安部百合子、稲田陽介、岡田諭、小川泰樹、尾上博一、河合修、坂本豊治、佐藤嘉孝、神野晋作、田島龍太、立谷聡明、谷梢、辻田淳一郎、仁田坂聡、花谷浩、久山高史、藤川翔、松井和幸、美浦雄二、三阪一徳、宮元香織、宮本一夫、村松洋介、森貴教、森本幹彦、山崎頼人、山田広幸、吉田浩之、渡部芳久、福岡県立朝倉高校（敬称略）

本研究は平成27年度島根大学『若手教員に対する支援』「磨製石剣からみた日本列島初期稲作文化の受容と変容」によって遂行された。

【参考文献】（*）印はハンゲル文献

- 有光教一1959『朝鮮磨製石剣の研究』
- 安在皓1996『青銅器時代集落研究』釜山大学校大学院考古学科博士論文（*）
- 岩田実太郎1974「庵治町の歴史 古代の遺物」『庵治町史』庵治町
- 岩永省三2005「弥生時代開始年代再考—青銅器年代論から見る—」『九州大学総合研究博物館研究報告』第3号
- 愛媛県1982「第三章 農耕文化の形成と発展」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県史編さん委員会
- 小田富士雄1959「佐賀県田代発見の石剣と土器」『九州考古学』7・8号、九州考古学会
- 小田富士雄1970「古代の日田」『九州文化史研究所紀要』15、九州大学文学部附属九州文化史研究施設
- 小田富士雄1973「対馬・ガヤノキB地点出土遺物の再発見」『史学論叢』第6号、別府大学
- 小田富士雄1978「磨製石剣とその出土地」『中間市史』上巻
- 乙益重隆1960「武器、狩猟具、漁撈具」『世界考古学体系 第2巻 日本Ⅱ 弥生時代』平凡社
- 乙益重隆1980「伝大久保出土の磨製石剣」『多良木町史』多良木町史編纂会
- 木村幾多郎・高橋徹1978「福岡県古賀町鹿部東町貝塚」『九州考古学』53
- 紅村弘1963『東海の先史遺跡総括編』
- 後藤守一1921「伊豫国発見の石剣」『考古学雑誌』第12巻第4号、考古学会
- 後藤守一1923「対馬瞥見録（その三）」『考古学雑誌』第13巻第3号、考古学会
- 後藤直2000「朝鮮青銅器時代」『季刊考古学』第70号、雄山閣
- 西園寺富水1923「忽那島出土石剣に就いて」『考古学雑誌』第13巻第10号、考古学会
- 清水宗昭1979「大分県大野郡千歳村出土の磨製石剣について」『九州考古学』53
- 下條信行1979「福岡県古賀町鹿部採集の有柄式磨製石剣」『九州考古学』53
- 下條信行1982「有柄式磨製石剣・磨製石鏃よりみた朝鮮と日本の関係」『日本考古学協会昭和57年度大会発表要旨』
- 下條信行1986「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開」『九州文化史研究所紀要』第31号、九州文化史研究所
- 下條信行1994「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」『社会科』学研究』第28号、「社会科」学研究会
- 下條信行1991「石製武器」『日韓交渉の考古学 弥生時代編』六興出版
- 沈奉謹1989「日本弥生文化初期の磨製石器に関する研究」『嶺南考古学』第6号、嶺南考古学会（*）
- 庄田慎矢2016「東北アジアにおける金属器受容と短剣形石器の出現」『青銅器の模倣Ⅱ』第65回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会
- 高橋健自1925『銅銚銅剣の研究』
- 武末純一1981「朝鮮磨製石剣の再検討」『古文化研究会会報』29、九州古文化研究会
- 武末純一1982「有柄式石剣」『末盧國』唐津湾周辺遺跡調査委員会編、六興出版
- 武末純一2004「弥生時代前半期の暦年代—北部九州と朝鮮半島南部の併行関係から考える—」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』
- 張龍俊・平郡達哉2009「有節柄式石剣からみた無文土器時代埋葬儀礼の共有」『韓国考古学報』72集、韓国考古学会（*）
- 鄭聖喜1985「慶南地方出土磨製石剣に関する研究」『考古歴史学誌』創刊号、東亜大学校博物館（*）
- 東亜考古学会1953「対馬—玄海における絶島対馬の考古学的調査』
- 長崎県教育委員会1974「対馬：浅茅湾とその周辺の考古学調査」長崎県文化財調査報告書第17集
- 永留久恵1963「対馬における考古学的遺跡の一覧表」『九州考古学』18
- 長沼孝1986「A.磨製石剣・石戈」『弥生文化の研究』第9巻、雄山閣
- 中村大介2006「弥生時代開始期における副葬風習の展開」『日本考古学』第21号
- 中村大介2012『弥生文化形成と東アジア社会』塙書房
- 中村豊2004「結晶片岩製石棒と有柄式磨製石剣」『季刊考古学』第86号、雄山閣
- 中山平次郎1918「銅銚銅剣並に石剣発見地の遺物（下）」『考古学雑誌』第8巻第9号、考古学会
- 中山平次郎1921a「太刀洗飛行場発見の石剣（附 大川村江辻出土の磨製石鏃に就て）」『考古学雑誌』第11巻第7号、考古学会
- 中山平次郎1921b「考古学雑録（六）」『考古学雑誌』第11巻第11号、考古学会
- 中山平次郎1931「雑餉隈駅附近に発見せる石蓋土壙と無蓋土壙（原始的墳墓の研究）」『考古学雑誌』第21巻第9号、考古学会
- 西口陽一「人・硯・石剣」『考古学研究』第32巻第4号、考古学研究会
- 朴宣映2004『南韓出土有柄式石剣研究』慶北大学校大学院考古人類学科碩士学位論文（*）
- 端野晋平2015「近年の弥生時代開始期墓制論の検討」『古文化談叢』第74集、九州古文化研究会
- 平郡達哉2006「慶南地域無文土器時代棺外副葬行為に関する一考」『石軒鄭澄元教授停年退任記念論集』釜山考古学研究会論叢委員会（*）
- 平郡達哉2012『墳墓資料からみた青銅器時代社会』釜山大学校大学院考古学科博士論文（*）
- 裴眞晟2006「石剣出現のイデオロギー」『石軒鄭澄元教授停年退任記念論集』釜山考古学研究会論叢委員会（*）
- 松岡史1962「弥生文化」『唐津市史』

- 松岡文一1965「愛媛県下の磨製石剣」『伊豫史談』175・176合併号、伊豫史談会
 宮本一夫2012「弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間関係」『古文化談叢』第67集、九州古文化研究会
 村上勇・川原和人1979「出雲・原山遺跡の再検討—前期弥生土器を中心に—」『島根県立博物館調査報告』第2冊
 森貞次郎1942「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」『古代文化』13-7
 柳田康雄1982「第2章 弥生時代の甘木」『甘木市史第2編 原始』167204
 柳田康雄2004「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』29
 柳田康雄2009「中国式銅剣と磨製石剣」『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』40
 山崎頼人2009「武器の副葬のはじまり」『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』
 李栄文1997「全南地方出土磨製石剣に対する研究」『韓国上古史学報』第24号、韓国上古史学会（*）

【報告書】

- 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995『持田町3丁目遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第58集
 李弘鍾・朴性姫・李僖珍2004『麻田里遺跡—C地区—』高麗大学校埋蔵文化財研究所研究叢書第18輯（*）
 小郡市教育委員会1985『横隈鍋倉遺跡』小郡市文化財調査報告書第26集
 小郡市教育委員会1994『横隈上内畑遺跡』小郡市文化財調査報告書第89集
 小郡市教育委員会2001『横隈上内畑遺跡4』小郡市文化財調査報告書第152集
 小郡市教育委員会2002『三沢ハサコの宮遺跡Ⅲ』小郡市文化財調査報告書第161集
 唐津市教育委員会1982『菜畑遺跡 佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査』唐津市文化財調査報告書第5集
 畿甸文化財研究院2006『平澤土津里遺跡』（*）
 佐賀県教育委員会2003『西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（2） 梅白遺跡』佐賀県文化財調査報告書第154集
 第二阪和国道内遺跡調査会1971『第二阪和国道内遺跡調査報告書』4
 東亜考古学会1953『対馬—玄海における絶島対馬の考古学的調査』
 長崎県教育委員会1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集
 長崎県教育委員会1988『中道壇遺跡』長崎県文化財調査報告書第90集
 福岡県立朝倉高等学校史学部1969「馬場町上原甕棺群遺跡」『埋もれていた朝倉文化-朝高創立60周年記念-』
 福岡市教育委員会・岡三リビック（株）埋蔵文化財調査室2005『雑餉隈遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第868集
 宗像市教育委員会1988『久原遺跡』宗像市文化財調査報告書第19集
 宗像市教育委員会1999『田久松ヶ浦遺跡』宗像市文化財調査報告47集
 峰町教育委員会1980『太田原丘遺跡』
 嶺南大学校博物館1999『時至の文化遺跡 I—調査現況, 支石墓ほか—』（*）
 嶺南大学校博物館2007『大邸月城里585遺跡』（*）
 呼子町教育委員会1981『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第1集

表1 日本列島出土磨製石剣一覧

番号	都道府県	出土遺跡	出土遺構	型式	共伴遺物	備考	参考文献	
1	長崎	対馬市上対馬町泉	箱式石棺	有段1式	型式不明の石鏃	有柄式がもう1点あったが、所在不明。	東亜考古学会 1953	
2		対馬市上対馬町舟志		無段1式			東亜考古学会 1953	
3		対馬市上県町志多留シゲ	不明	有柄式片	?		文章のみ。	永留 1963
4		対馬市上県町エイトノダン	箱式石棺 (伝承)	不明	?		文章のみ。1932,33年小学校新築時出土。	東亜考古学会 1953
5		対馬市上県町金暮	箱式石棺	有段1式				東亜考古学会 1953、有光1959
6		対馬市峰町三根井出	不明	有柄	?		文章のみ。	永留 1963
7		対馬市峰町タカマツノダン	石棺?	有蓋3式	?		三根エイシ。	長崎県教育委員会 1974
8		対馬市峰町ガヤノキH地点A	箱式石棺	有蓋4式				小田 1973
9		対馬市峰町ガヤノキH地点B	箱式石棺	有段1式				小田 1973
10		対馬市峰町吉田エビス山	箱式石棺	有柄	?		文章のみ。	永留 1963
11		対馬市峰町吉田チゴノハナ	箱式石棺	無段2式			ほぼ完形	長崎県教育委員会 1974
12		対馬市峰町吉田太田原丘	箱式石棺	無段2式		銅剣?		峰町教育委員会 1980
13		対馬市峰町木坂経の原	不明	有柄			文章のみ。	永留久恵1963
14		対馬市峰町木坂	?	有蓋3式		有蓋石鏃	木坂ヨケジ	長崎県教育委員会 1974
15		対馬市豊玉町仁位堂の内		無段2式				東亜考古学会 1953
16		対馬市豊玉町仁位堂の内 (伝)		無段2式				東亜考古学会 1953、有光1959
17		対馬市豊玉町仁位堂の内		有柄			文章のみ	永留 1963
18		対馬市豊玉町仁位ハロウ	1号石棺	有蓋2式				長崎県教育委員会 1974
19		対馬市豊玉町山田?	不明	有蓋3式			黒色頁岩	東亜考古学会 1953
20		対馬市豊玉町加志々中学校A	箱式石棺	無段2式				長崎県教育委員会 1974
21		対馬市豊玉町加志々中学校B	箱式石棺	無蓋		磨製石鏃 3		長崎県教育委員会 1974
22		対馬市豊玉町佐保役場跡	箱式石棺	有柄	?		文章のみ	永留 1963
23		対馬市豊玉町千尋瀬		有蓋3式				小田富士雄・韓炳三編1991
24		対馬市美津島町洲中道壇	4号石棺	有蓋1式				長崎県教育委員会1988
25	佐賀	唐津市大友	3次1号石棺墓	有蓋3式		人骨残存、棺外	呼子町教育委員会1981	
26		唐津市松浦川川底		無段2式			松岡 1962	
27		唐津市菜畑	7~8層	有蓋1式				
28		唐津市菜畑遺跡八反間	夜白式単純層					
29		唐津市菜畑遺跡松円寺山	板付Ⅱ・共伴包含層					
30		唐津市梅白	SH239住居址	有蓋2式			弥生前期住居址	佐賀県教育2003
31		唐津市梅白	包含層	有段4式			縄文晩期~弥生前期の包含層	佐賀県教育2003
32		神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里		無段2式				小田富士雄・韓炳三編1991
33		鳥栖市田代町永吉	土墳墓	無段1式		丹塗丸底小壺		小田 1959
34	福岡	糸島市二丈町曲り田	33号住居址	有柄未成品			宮本 2012	
35		糸島市前原町宇田川原		有柄未成品			武末 1982	
36		糸島市志摩町 (伝) 福富	?	無段2式			ほぼ完形	有光1959、宮本 2012
37		福岡市西区今宿今山		有柄未成品			未製品	有光1959、小田 1959
38		福岡市博多区雑餉隈	3号木棺墓	有段1式		有蓋石鏃3、土器1		福岡市教育委員会2005
39		福岡市博多区雑餉隈	11号木棺墓	無段1式		土器1		福岡市教育委員会2005
40		福岡市博多区雑餉隈	15号木棺墓	無段1式		有蓋石鏃5、土器1		福岡市教育委員会2005
41		福岡市早良区有田七田前		有蓋1式				
42		筑紫郡那珂川町片縄浦ノ原		有段1式				高橋 1925、武末1982
43		朝倉市馬田町上原A		無段2式				朝倉高校1969
44		朝倉市馬田町上原B		有段2式				朝倉高校1969
45		糟屋郡宇美町宇美		無段1式				有光 1959
46		宗像市田久松ヶ浦	土墳墓 SK201	無段1式				宗像市教委1999、宮本 2012
47		宗像市田久松ヶ浦	木棺墓 SK206	無段1式				宗像市教委1999、宮本 2012
48		宗像市久原	木棺墓 SK 8	無段1式				宗像市教委1988、宮本 2012
49		福津市今川遺跡		無段2式				酒井仁夫・伊崎俊秋1981
50		福津市今川遺跡		有蓋2式				酒井仁夫・伊崎俊秋1981
51	中間市垣生中間中学校校庭	箱式石棺 (伝)	無段2式			粘板岩質頁岩、第45図1	小田 1978	
52	中間市 (伝) 垣生遠賀川川床	不明	有段1式		磨製石鏃 4	灰色粘板岩質頁岩、第45図2	小田 1978	
53	中間市御館町御館山山麓A	不明	無段2式			黒鼠色粘板岩質頁岩、第46図7	小田 1978	
54	中間市御館町御館山山麓B	不明	無段2式			黒鼠色粘板岩質頁岩、第46図8	小田 1978	
55	中間市砂山遠賀川河床	不明	切先片			頁岩系、第46図9	小田 1978	

56		中間市中間小学校前遠賀川河床	不明	身部片		粘板岩、第46図10	小田 1978
57		中間市砂山遠賀川河床	不明	切先片		頁岩系、第46図11	小田 1978
58		中間市中間小学校前遠賀川河床	不明	無段 2 式		粘板岩、第46図12	小田 1978
59		中間市上底井野	不明	無段 2 式		身部磨耗、柄部断面長方形、第47図13	小田 1978
60		中間市中底井野中曾根	不明	有茎? 未成品		鉄剣形未製品、第47図14、鼠灰色頁岩	小田 1978
61	福岡	中間市垣生猿喰	不明	無段 2 式		黄白色頁岩、第48図15	小田 1978
62		田川市原若狭		無段 2 式			有光1959
63		行橋市天生田		無段 1 式			有光1959
64		古賀市鹿部	採集、貝塚?	無段			下條 1978
65		大野城市中・寺尾	8号土墳墓	?			
66		小郡市寺福童	R-8 木棺墓	有段 1 式			小郡市教育委員会2007
67		小郡市横隈鍋倉	42号貯蔵穴	無段 1 式			小郡市教育委員会1985
68		小郡市横隈上内畑 4 次	SR21	無段 2 式			小郡市教育委員会2001
69	熊本	上益城郡郡山都町(清和村)川口山立		無段 1 式			浅野ほか1960
70		菊池市七城町亀尾蛇塚		有茎 2 式			高橋1925
71		球磨郡多良木町黒肥地(伝)大久	不明	有段 3 式			乙益 1980
72	大分	日田市吹上町吹上原		無段 1 式?			小田 1970
73		豊後大野市千歳町千歳	畑耕作中出土	無段 1 式		灰色頁岩	清水 1978
74	宮崎	(伝) 西都市				詳細不明	武末1982
75	愛媛	西予市(旧東宇和郡)宇和町宇和町		無段 3 式			松岡 1965
76		伊予郡砥部町田の浦		無段 3 式		鋒欠損、出土経緯不明	松岡 1965、下條1994
77		伊予郡松前町出作宝剣田	大石 下?	無段 1 式		鋒・身部一部欠損	松岡 1965、下條1994
78		伊予市宮ノ下寺山		無段 3 式		鋒欠損	松岡 1965、下條1994
79		伊予市宮ノ下東谷		無段 3 式		身・柄部一部欠損、出土経緯不明	松岡 1965、下條1994
80		松山市鷹子町乳母横		無段 3 式			松岡 1965
81		松山市桑原宝が峠		無段 3 式			松岡 1965
82		松山市持田 3 丁目	木棺墓SK32	有茎 2 式			愛媛県埋文1993
83	松山市持田 3 丁目	土墳墓SK34	有茎 3 式		緑色結晶片岩	愛媛県埋文1993	
84	香川	高松市庵治町	高島近くの海中より引き上げ	無段 2 式			岩田 1974
85	鳥根	出雲市原山遺跡	採集	有茎 2 式			村上・川原1979